見守ってくれる人がいる この場所だから就農したい

―― 熊本県 JA阿蘇

新規就農者の定着には、彼らの視点に立ち、それぞれのニーズに合った迅速な支援が不可欠だ。阿蘇に魅力を感じ、就農したいと集まってくる人々。その目の輝きに応えたい――。地域農業をけん引してきたベテラン農家と手を携え、未来を切り開くサポートに奮闘するTAC（地域農業の担い手に出向く担当者）の活動を紹介する。

下曽山弓子＝写真 *photo by Yumiko Shimosoyama*　JA全農TAC・営農企画課＝企画協力

後列左から、園田さん、室さん、綿住さん、綿住さんの下で研修中の市来祐介さん（40）、綿住さんの妻・千尋さん（44）、市来さんの妻・悠子さん（37）。前列左から、室さんの下で研修する大野廣保さん（45）、大友正雄さん（32）、鳴瀬虎琉さん（19）

阿蘇地域では近年、新規やUターンによる就農が増えている。しかし、新たな土地で心機一転農業を始めたいという希望を、阻む壁がある。

「技術的な課題をはじめ、とくに新規参入では、知り合いがいない地域で生活を始めることへの不安を感じる人が多い。農地の取得や初期設備投資の資金繰りなども大きな課題です」

そう話すのは、TACでJA阿蘇営農部営農企画課の園田真治さん。新規就農者支援は、JA阿蘇のTAC活動の柱の一つに位置付けられている。地域農業を担う新規就農者に安心して営農し、暮らしてもらうため、TACが提案するのが「農業師匠制度」の活用だ。

二〇一六年にスタートした同制度は、就農に必要な技術や知識を持つ農業者を「農業師匠」として認定し、農業研修生を派遣して新規就農を支援する制度（※）。併せてJAに就農や農業研修に関する相談窓口を常設し、専属職員である新規就農マネージャーを配置している。同職を務める杉原隆太さんが話す。

※JA阿蘇が近隣の行政と連携して実施し、2020年時点で63人が農業師匠として認定されている。師匠の経営品目は、野菜、畜産、花卉、水稲など多岐にわたる

「就農して間もない人が、不安を口にするのは簡単ではありません。販売高が伸びていなかったり、経営面積が縮小していたりというサインを見逃さず、他部署と連携しながら、迅速に対応する体制をとっています」

園田さんも、「わたしたちの役割は、新規就農者が孤独を感じないようにすること」だと、杉原さんの言葉にうなずいた。

マネージャーはTACと共に、農業師匠とのマッチングの段階から就農希望者と関わる。就農を希望する時期や、理想とする経営についてヒアリングし、最適な農業師匠を紹介することが始まりだ。

ビジョンを描くサポート

阿蘇市内の七五aのハウスでアスパラガスを生産する室治夫さん（72）も師匠の一人だ。これまで一〇人以上を独立まで導いてきた。持てる技術を惜しみなく研修生に伝えている室さんだが、同時に地域でのつきあいをなにより重視する。

「近所の人に、阿蘇でお世話になる感謝を込めて挨拶していれば顔を覚えてもらえます。親しくなれば、困ったときに協力し合い、きずなが深まります」

園田さんや杉原さんは、師匠と研修生の下を訪れ、双方の声をヒアリング。他部署とも連携し、JAの総合事業を活用した支援を行う一方で、五年後を見すえた経営計画の作成をサポートする。研修生が、二年間の研修中に明確な就農後のビジョンを描けることが目標だ。室さんの〝弟子〟である綿住輝さん（48）は現在、自身も師匠となり、研修生を育てている。

「知識ゼロからスタートする研修生は、技術の習得と同時に就農後のことまで考えなければいけません。TACやマネージャーはJAの事業だけでなく、行政の制度についてもかみ砕いて説明し、活用まで支援してくれます。今後はオンラインツールを使うなど、さらに気軽に相談や交流ができたらいいですね」

園田さんがその言葉をすかさずメモした。小さなつぶやきも聞き逃さず、かならず応える。その姿勢もまた、研修生の安心と意欲向上につながっている。

地域ごとにTACを配置し、農家の声を確実にキャッチ

JA阿蘇は6人のTAC（兼任）と管理者1人を配置。担当エリアを分けることで、農家の声を拾いやすく、地域ごとの状況を踏まえた支援がしやすい体制だ。新規就農者に関する情報は、新規就農マネージャーと共有し、提案内容を協議している。園田さんはJA青壮年部の事務局も担当し、同世代の仲間づくりの面でもサポートしているそうだ。TACは新規就農者支援のほか、担い手の不安解消や農業法人のコスト低減支援などにも注力している。

新規就農マネージャーの杉原さんは、「阿蘇地域では規模拡大が進み、新規就農者を含む担い手への期待が高まっている。プレッシャーを感じすぎることなく、安心して理想とする営農を実現できるようバックアップしていきたい」と語った

融資提案と経営計画のセットで安定経営を実現

TACやマネージャーの支援による2020年度の青年等就農資金（設備・運転）の活用実績は27件、総額2350万円（前年度対比221%）に及び、資金の融資が就農・経営計画作成の後押しとなった。計画に沿って営農し、1年めから部会平均を大きく上回る販売額を達成する人も。営農へのモチベーションが高まり、離農者数ゼロという高い定着率につながっている。

JA阿蘇

阿蘇市、産山村、高森町、南阿蘇村、西原村、小国町、南小国町、蘇陽（山都町）が管内。全国でも有数の降水地帯であり、日本最大の草原地帯でもある。豊かな地下水と雄大な自然の中で、米、麦、果実（イチゴ・メロンなど）、野菜（トマト・アスパラガスなど）、花卉・果樹、畜産など多様な農業を展開。

KUMAMOTO ASO 農業師匠

農業師匠制度を活用し、2016年の開始以来、33人が就農。地域との関係づくりができるよう師匠が導くことで、2年間の研修期間中に地域内に農地を確保でき、スムーズな就農を可能にしている。弟子は就農後も師匠の圃場を訪ねるなど、交流を続けている

TACだから聴ける声がある

イラストはJA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（https://www.zennoh.or.jp/tac/）

［じっくり話し合おう］自身の営農を振り返り、TACに相談してみたいことを整理しよう